神のやさしさ (VII):救いの喜び を取り戻す

「神よ、わたしを憐れんでくださ い、御慈しみをもって。深い御憐れ みをもって、背きの罪をぬぐってく ださい | [1]。3000年来、詩編ミゼ レーレ (Miserere、詩篇51) は神の 民の各世代の祈りを豊かなものにし ました。教会の祈りでは毎週金曜日 の唱和に使っています。オプス・デ イでは、パドレが毎晩床にひれ伏し てこの詩篇を唱えます[2]。これはこ の「憐れみの賛歌」の内容を具体化 することです。教皇様はこう言われ ました。「罪を悔やみ、打ちひしが れた心からでる賛歌は、いかなる罪 よりも大きな神の忠実を宣言するも のです | ^[3]。

詩編ミゼレーレは、私たちに「過ちと恩恵についての考察をより深くするよう」 [4] 促します。イスラエルの伝統はこの詩篇を、預言者ナタンが神の信託によりバト・シェバとの不倫とウリア殺害を諌めた時に、ダビデ王が口にした祈りとしています

^[5]。預言者は王を直接なじることは せず、ダビデ自身が自己の非を悟る よう、たとえ話をしました^[6]。 Peccavi Domino、「わたしは主に罪 を犯した」[7]。「わたしを憐れんで ください」と叫んだダビデの心境に は、自己の過ちだけでなく、周りの 人たちをも悲しみに巻き込んだこと への嘆きが表れています。罪が神に 背き、人々と自分自身を傷つけるも のだと認識することによって、全て を正すことができる唯一の方である 主の内に、庇護と癒やしを探し求め ます。「心に責められることがあろ うとも、神は、わたしたちの心より も大きく、全てをご存じだからで

彼らは自分が何をしているのか知ら ないからです

す」[8]。

罪は人に、一時の間、自由を約束します。神から離れることによって、 私たちが真に自分らしくなれるとい

回心は常にダビデ王の話のように即座に始まるとは限りません。その過程は人によって違います。無分別は、罪に先立ち、罪に同道し、罪によって強まり、長引き、したことによって強ま化し、「大したことではよっなどと思わせます。これることです。ながしばしば罪人には難しく、罪自体には寛容です[11]。罪人

に対して厳しいのは、その人の行動に罪の関さがはっきりのを軽種をあるとのです。しかし罪そのもととのを整理を表するこのでは、そのないには、です。とないには、ないです。私には、のですがない。ないは、です。ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないまでは、ないないないない。

言葉の深い意味をくみ取ることが出 来なくなるでしょう。神から離れる とき、私たちは自分何をしている 知っていると同時に知らないので す。振る舞いが悪いことには気づき ますが、そこからどんなことが派生 するかを忘れているのです。主はこ の両面を、またその後の深い悲しみ をもご存じです。聖ペトロは主を裏 切ったとき、自分が何をしているの か知っていると同時に知らなかった です。その後「激しく泣」[13]きまし た。その涙によって、彼はより清く 透き通った目で物事を見れるように なったのです。

「キリストの憐れみは、軽々しく口に上るようなお情けではなく、また悪を軽視することでもありません。キリストは、悪の全ての重荷とその全ての破壊力を全霊全身で担い、その御苦しみと悲哀の愛熱によって悪を焼き滅ぼし、浄化したのです」
[14]。「何をしているかを知らないか

ら」という十字架上からの主のゆる しの言葉は、私たちが父の家に戻る ための、憐れみに満ちた主のご計画 を垣間見せてくれます。ですから、 聖母に十字架上から私たちの保護を 委ねられたのは偶然ではありませ ん。

懐かしい御父の家

「人間の一生とは、ある意味で、何 度も御父のもとに戻ることだと言え ます」[15]。回心、そして連続的な回 心は、何らかの形で宿無しになって しまった私たちが出発すること、そ して再出発を繰り返すことです。放 蕩息子は「使用人たちが焼きたての パンで朝食をとっている父親の家を 懐かしく思い出しました。郷愁は偉 大な感情です。これによって心は大 きくなりますから、この感情は慈し みと関連しています (…)。郷愁は 果てしない地平線に向けて広がって いきます。この若者は、この懐かし

さという観点から自分自身を見つめ、自己の哀れな状態に気づいたのでした。私たちは一人ひとり、自己のもっとも惨めな点を探したりのもっとも惨めな点を探したまましたりすることができます。一人とりが何らかの惨めさを内に秘めています。…それを見つけ出す恩恵を願うことが必要です」[16]。

父の家を離れるとは、放蕩息子が気 づいたように、事実、自分自身の家 を見捨てることです。彼は、自分自 身の向上を阻むように思えた家を、 決して捨てるべきではない家庭とし て再発見します。一方、父の家にい ても心は遠く離れている人もいま す。たとえ話の長男は、家を離れた ことはなかったとしても、心は遠く 離れていました。イエスはイザヤの 言葉を引用して言いました「この民 は (…) 唇でわたしを敬うが、心は わたしから遠く離れている | [17]。

兄は「お父さん」と呼ぶことも 「弟」と言うこともなく、自分のこ とだけ考えています。彼は自分がい つも父親のそばにいて、父親に尽く してきたことを自慢しています。 (...)。なんと哀れな父親でしょう。 一人の息子は立ち去り、もう一人も 決して父の近くにはいなかったので す。この父親の苦しみは、わたした ちが神から離れてしまったときの神 の苦しみ、イエスの苦しみと同じで す。その苦しみは、わたしたちが神 から立ち去ったり、神のそばにいて も心から近づいていないために生じ るのです」[18]。私たちにも、弟のよ うでなくとも兄のように振る舞った 時が人生においてあったかもしれま せん。もしくは兄以上のひどい振る 舞いをしていたことに気づくことが あるかもしれません。この気づきは 神からの恵みです。神は、私たちが もっと神の近くに来るようにとお望 みなのです。新たな回心の時です。

兄と父親との会話において^[19]、父親 の優しさとその対極にある兄の頑な な心が目に留まります。兄の返事か ら、彼が父の家にいる喜びを失って しまっていたことが読み取れます。 ですから、弟の帰りを喜ぶ父と共に 喜ぶことが出来なかったのです。弟 と父親の失敗にだけを目に留め、そ れを咎めるだけでした。「内的生活 が自己の関心のみに閉ざされている と、もはや他者に関心を示さなくな り(...)、神の愛がもたらす甘美な 喜びを味わうこともなくなり、つい には、善を行う熱意も失ってしまう のです。信仰者にも、つねにこの誘 惑に陥る危険性が確かにあります |

父親もその頑なさに驚き、息子の心を和らげようとします。自分のもとに留まっていたにも関わらず、兄も、はっきりとした自覚なしに、実のところ弟のように軽薄で自己中心的な生き方をしたかったことが兄の

態度から読み取れます。 それは、弟 に比べてより〈理性的〉で、気づき にくいもので、場合によってはより 危険なものでした。父親は説明しま す。「お前のあの弟は死んでいたの に生き返った。いなくなったのに見 つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ 喜ぶのは当たり前ではないか」[21]。 彼は父親の強さと母親の優しさでた しなめます。「わが子よ、喜ぶのは 当たり前ではないかしと言い、息子 の心に問いかけます。「兄も父親の いつくしみに気づく必要がありま す」「22」。彼も父の家を懐かしさを もって思い、そこで私たちの帰りを 待ちわびる父の優しさに気づく必要 があるのです。

救いの喜びを取り戻す

「あなたに、あなたのみにわたしは罪をおかし、御目に悪事と見られることをしました」[23]。罪に関することについて世を納得させる聖霊こそ

^[24]、この懐かしさとこの不快感を示 してくださる御方です。それは単な る内的な不安ではありません。こ傷 の源はもっと深い所にあります。神 から遠ざかり、主を一人だけにして しまったのです。そして、私たちは 一人ぼっちになり、In multa defluximus^[25]、多くの事に流される と聖アウグスティヌスは言います。 神から離れるといろいろなことで散 漫になり、家は荒れ果ててしまいま す^[26]。聖霊は、罪を赦すことのでき る唯一の神に、心を向けさせる御方 です[27]。神の霊は、創造の初めから 水の面を動いていたように^[28]、今は 人々の心に働きかけておられます。 聖霊は、罪人の女性を無言でイエス に近づかせます。そして神は慈しん で彼女を迎え入れますが、会食者た ちには、涙と香水と髪、それらが何 を意味するのかが分かりません[29]。 イエスは、彼女について、多くの罪 を赦されたことは、私に示した愛の

大きさで分かる、と仰せになりました^[30]。

神の家を懐かしむことは、神の近し さとその慈しみに思いを向けるとで す。ですから、「繊細で、犠牲をい とわぬ寛大な愛で、人間的にも神的 にも心の痛みを感じ | [31] ることがで きるようになります。私たちが弟の ように御父のひざ元まで近寄るな ら、私たちの傷をいやす薬は主なる 神であることが納得できるでしょ う。そのとき〈三番目の子〉である イエスと出会います。イエスが私た ちの足を洗うのです。イエスが私た ちのためにしもべになられるので す、

主は、「『神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、しもべの身分になる』(フィリピ2・6-7)かたです。しもべであるこの息子こそ、イエスです。イエ

スは、御父の広げられた両腕と心です。イエスは放蕩息子を迎え入れ、 その汚れた足を洗い、ゆるしの祝宴 を準備しました」^[32]。

Cor mundum crea in me、「神よ、 私の内に清い心を創造し、新しく確 かな霊を授けてください」^[33]。この 詩編は幾度も心の清さに関して述べ ます^[34]。これは完璧主義とか小心と かの問題ではありません。「キリス ト信者は汚点のない経歴書の収集狂 ではない」[35] からです。愛の問題で す。後悔する罪人は、心を治癒し神 と共に生きる喜びを取り戻すため に、手段を講じる心づもりを持って います。Redde mihi Laetitiam salutaris tui. 「御救いの喜びを再び 私に味わわせてください」[36]。物事 をこのような観点から捉えると、告 解は、一種の事務手続きのような冷 たいものではないことが納得できる でしょう。「次のように自問したら よいでしょう。ゆるしの秘跡にあず

かった後、わたしは喜んでいるだろうか。それとも、すぐに次の用事に向かうだろうか。医師のところに行って検査の結果が悪くなかったことを聞いたとき、その結果をすぐに封筒にしまって次の用事に移っていないだろうか」 [37]。

喜ぶのはその価値を知っているから で、その人はゆるしを受けたことに 感謝します。そして、償いは単に正 義を取り戻す手段以上のものである ことを理解します。償いは、「主 よ、あなたに背き、罪を犯しまし た と言う言葉を行動で表す必要を 感じる心の要求です。それで聖ホセ マリアは皆に「償いの精神」[38]を持 つよう勧めていました。「打ち砕か れ悔いる心 | ^[39] があれば、継続的 に、立ち戻り、和解する必要がある ことが分かります。愛を増し、深め る手段は、愛自体です。「愛には愛 で応えるべきだ」^[40]。それゆえ、償 いとは、神と人々を悲しませ苦しめ

たすべてのことを償いたいと望む愛 です。それは「変わったことをする ことではなく」^[41]、大げさではな い、喜びを伴うものです。これが、 ゆるしを与えた後に、司祭が告白者 を送り出すときの言葉の意味です。 聴罪司祭は言います「あなたの善い 行いとあなたが苦しむ悪が、罪の僧 いとして役立ちますようにし。さら に「償いを果たすために、人生はな んと短いことか」』。人生とは喜び を伴った痛悔を生きることです。苦 悶や小心に陥らずに、神を身を委ね て痛悔することです。cor contritum et humiliatum, Deus, non despicies、「打ち砕かれ悔いる心 を、神よ、あなたは侮られません| [43]

[1] 詩篇51(50)・3

- ^[2] De Spiritu 111番参照:「夜パドレは、就寝前にひれ伏してミゼレーレを唱える。出来ないことがあったら、息子の一人がパドレに代わって唱える」
- ³ フランシスコ、2016年6月2日司祭 年における一番目の説教
- [4] 聖ヨハネ・パウロ二世、2001年10 月24日一般謁見演説
- [5] 2サムエル11·2~参照
- [6] 2サムエル12・2-4参照
- [7] 2サムエル12・3
- [8] 1ヨハネ3・20
- ^[9] ホセマリア・エスクリバー『神の 朋友』260番
- ^[10] ホセマリア・エスクリバー『知識 の香』57番

- [11] フランシスコ、2015年12月24日 説教参照
- [12] ルカ23・34
- ^[13] マタイ26·75
- [14] ヨセフ・ラッティンガー枢機卿、 2005年4月18日教皇選出のためのミ サの説教
- ^[15] ホセマリア・エスクリバー『知識 の香』64番
- [16] フランシスコ、2016年6月2日司 祭年における一番目の説教
- __ イザヤ29·13、 マタイ15·8参照
- [18] フランシスコ、2016年5月11日一 般謁見演説
- [19] ルカ15・28-32参照
- ^[20] フランシスコ、使徒的勧告『福音 の喜び』2番

- [21] ルカ15・32
- [22] フランシスコ、2016年5月11日― 般謁見演説
- ^[23] 詩編51(50)·6
- [24] ヨハネ16・8参照。聖ヨハネ・パウロ二世は、このイエスの言葉を、回勅「聖霊一生命の与え主」(1986年5月18日)27-48番において深く黙想し、このように解釈している
- ^[25] 聖アウグスティヌス、『告白』10 巻29章、40
- ^[26] マタイ23・38参照
- ^[27] ルカ7·48参照
- [28] 創世記1·2参照
- [29] ルカ7・36-50参照
- ^[30] ルカ7·47参照

- ^[31] ホセマリア・エスクリバー『神の 朋友』232番
- ^[32] フランシスコ、2016年3月6日 「お告げの祈り」でのことば
- [33] 詩篇51(50)·12
- ^[34] 詩篇51(50)・4、9、11、12、19 参照
- ^[35] ホセマリア・エスクリバー『知識 の香』75番
- ^[36] 詩篇51·14
- ^[37] フランシスコ、2016年3月24日説 教
- [38] ホセマリア・エスクリバー『鍛』 784番参照。師は『神の朋友』 138-140番で、償いの精神とその具 体的な現れについて説明している
- [39] 詩篇51・19

- ^[40] ホセマリア・エスクリバー『鍛』 442番
- ^[41] ホセマリア・エスクリバー『鍛』 60番
- ^[42] ホセマリア・エスクリバー、十字 架の道行、第7留
- [43] 詩篇51·19

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ Kami-noyasashisa-vii/ (2025/11/19)